

長野県知事指定伝統的工芸品

あじまがさ

阿島傘

令和6年9月20日指定



【製造地域】

長野県

下伊那郡

喬木村

概要

阿島傘の伝統技術は、1700年代[江戸時代中期]から、阿島地区（現在の下伊那郡喬木村）で300年以上受け継がれてきた。阿島傘は、骨になる竹と雨よけの和紙はもちろんのこと、骨をつなぐ「ろくろ(エゴノキ等)」、耐久性を向上させるための「ベンガラ」等、地域内で採取できる様々な材料により製造されてきた。「骨の数だけ技がある」とも言われる。傘の絵柄は作り手によって多様で美しく、日用品としての用途だけでなく観光やイベント等でも活用されている。

歴史・沿革

起源は1737年[江戸時代中期]に、浪合の関所を通過しようとした京都の傘職人が腹痛に倒れた際に関所の役人が親切に介抱し、そのお礼にと傘作りを伝承されたという説と、同時期に、関所の役人が木地師を通じて、岐阜新町（岐阜県）の傘ろくろ師の下請け仕事をもらい、傘製造を内職として始めた説の2つの説がある。

地域を治めた知久氏の推奨により江戸時代後期には、阿島傘の生産が多くなり、生産の中心は、武士から村人に移り、販売先も広範囲となった。明治時代末期には、生産量が年間30万本となり、大正時代には景気の減退等を理由に需要に少し陰りがみえるも、昭和20年頃までは産業として発展を遂げた。

戦後の混乱が収束した昭和20年代後半から需要が減少し始め、1950年代に洋傘が人気となり、若者の和傘離れが進んだことで、昭和45年には傘製造を行う事業者が江戸時代から続く1軒のみとなったが、地域の支援等もあり現代でもなお商売が継続しており、新たに起業する者も現れた。

(問合せ先)

阿島傘振興会

(事務局：喬木村役場産業振興課商工観光係)

〒395-1107 長野県下伊那郡喬木村 6664 番地

TEL：(0265) 33-5141

